



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第3主日 B年(2024年3月3日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 20章1—17節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 1章22—25節

福音朗読：ヨハネによる福音書 2章13—25節

## おきて い 掟を生きる

三つの朗読から

第一朗読にある「わたしは熱情の神である」(5節)という神さま側からの自己表明は印象深いです。神さまは熱意の神、熱情の神です。人間に対して強い想いを抱いた神なのです。その熱情の故に、時にはねたみのような感情もわき上がる、そんな神です。それほどに神さまは人間を愛してくれます。今日の朗読にある十の掟は、わたしを愛し、導き出してくださった神さまへの、わたしの側からの愛の応答となります。

第二朗読の「神の力、神の知恵」(24節)は、信じない者にとっては愚かしいものに見える十字架のキリストこそが神の力であることを伝えています。イエスさまは、神さまから愛されている「神の子」でした。愛されている人が、その愛に応えようとするとき、イエスさまにとっては十字架しかなかったのです。

福音の中の小さな言葉「熱意」は、イエスさまのおこころを表します。神さまは「熱情の神」です。イエスさまも同じく「熱意」の人です。動物や商人を追い出すイエスさまのおこころの中には神さまへの「熱意」が働いていたのです。それは、人間の思惑に汚れてしまった神殿を、本来の姿へ変えるという「熱意」だけでなく、ご自分が「しるし」となり、父なる神さまへの犠牲となるという覚悟です。こうして、新しい礼拝が始まります。

説教：掟を生きる

いわゆる「神殿の浄め」あるいは「宮清め」と呼ばれる話が今日の福音です。この話は他の福音

書にも見られます。しかし、他の福音書では、イエスさまが十字架にあげられる直前の出来事とされているのに対して、『ヨハネによる福音書』では、イエスさまの活動の始まり、カナの婚礼の後の出来事とされています。また、羊や牛を追い出したことにも言及しています。この点も、他の福音書との違いです。

掟を守ることは大切なことです。しかし、もっと大切なのは掟を生きることです。今日の第一朗読で示された十の掟(十戒)は、守るだけでなく、生きるためにあるのです。神さまとの関わり、人との関わりを生きる上で掟は必要なものとなります。しかし、いつの間にか掟を守ることだけに関心が向かっています。そして、守っている人はプライドと誇りに満ち、守っていない人を裁きます。

今日の福音の場面は神殿です。神殿は神と人が出会う場所です。しかし、イエスさまの時代は神への犠牲を献げる、献げ物ばかりに人々の関心があつたようです。いつの間にか神殿は、献げ物の便宜をはかる商売人であふれていました。

「熱情の神」から愛された「愛する子」であるイエスさまもまた、熱情の方でした。動物や商人や両替商を神殿から追い出します。それは、神の家である神殿が人間の思いに汚れてしまうことが認められなかったからです。

しかし、それだけではありません。イエスさまが羊や牛や鳩を神殿から追い出すのは、イエスさま自身が犠牲となる覚悟がおありになったからです。残念ですが、人々にはイエスさまのこのおこころが分かりませんでした。というのも人々は、神殿で動物を献げるという仕方以外、神さまへの真の礼拝が分からなかったし、それを想像することもできなかったからです。神殿の境内で牛や羊や鳩を売り、両替をするという人間の小賢しさにこだわってしまうと、神の愚かさである十字架の犠牲が分からないのです。

イエスさまは新しい時代を始めます。それはご自分が「しるし」となる新しい礼拝の始まりです。イエスさまの十字架は、神と人をつなぐ「しるし」なのです。同時に「熱情の神」の愛の「しるし」なのです。

四旬節の後半、イエスさまの十字架を見つめる日々を過ごしましょう。

### お知らせ

来週、3月10日は運営協議会のため8時半のミサはありません。

9時半のミサの後で運営協議会に参加しましょう。